



クレバス

12月6日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

12月6日のおはなし「クレバス」

目を開けるとあたりは一面、青白く輝いていた。遙か頭上に細いまぶしい光がひとすじ見えるが、それ以外はとても均一に青白い光がまんべんなく行き渡っている。頭上のまぶしい光の近くほど明るいので恐らく光源はあそこだ。あそこからの光がこのすべすべ光る壁に反射して巨大な空間全体を照らし出しているのだ。

それは本当に見たこともない景色だった。微妙な濃淡を見せながら青白く輝く2つの巨大な壁がわたしの両脇にあって、それが遙かな高みのひとすじの光めざしてそそり立ち、あの光のあたりで丁度くつつこうとしているように見える。それを見つめているうちに思い出す。滑落したのだ。あそこから。

これは夢の中の景色ではないし、幻覚を見ているわけでもないし、付け加えるなら死後の世界でもない。そうだ。わたしは登山の最中にクレバスから滑落したのだ。しかしあの光のすじがクレバスだとすると生きているのが不思議だ。あんなに高くから落ちたらひとたまりもないはずだ。

そう思って周囲を見ると氷の表面をひっかいた痕跡がくっきり見えた。右手のなだらかな斜面を延々と滑り降りてきたようだ。その跡を目で追うと右手の氷壁が徐々に高度を上げていくあたりまでたどれた。恐らくあのあたりにまず着氷し、そのまま徐々にスピードを落としながらここまで来たのだろう。

ずっと目を開けた時の姿勢のままだった。ようやく身を起こすことを思いつく。重たい背囊のせいでそのまま起きあがることはできない。いったん身体を横倒しにし、背囊を立てるようにしながらゆっくり上体を起こし、まず足を投げ出した姿勢になる。首がひどく痛いのは無理な姿勢で気を失って寝違えたからだろう。

冷え切ってみしみしい身体を殴りつけながら時間をかけて立ち上がり、改めてあたりを見回す。左右の氷壁の先がどうなっているのかよく見えない。それほど巨大な空洞なのだ、ここは。クレバスからの光が左右の氷壁に陰影を与えている。その巨大な空間は荘厳なまでの静けさが支配している。

時折クレバス越しに雪片が舞い落ちてきて、不思議な影をまきちらす。氷の宮殿。息を飲むほど美しい氷の宮殿。しかしわたしにとっては壮麗な牢獄にほかならない。ここからあのクレバスまで登ることは考えられない。ほぼ絶望的だ。このつるつるの絶壁を登攀しようとして失敗したら、今度は命がない。

氷壁沿いに歩いていけば、あるいはどこか外に出られるかも知れない。そこには何の根拠もなかったが、ここに永遠に立ちつくしていても死期を早めるだけだ。左右の氷壁に挟まれた空間のずっとずっと先の方に目を走らせ、ほんの僅かだが明るく感じられる方に進むことにした。

半日ほど歩き、すっかり外光が薄れかかった頃だった。左右の氷壁がいきなり遠ざかり始めたかと思うと突如巨大な空間が広がっていた。いままで歩いてきた空間など比較にならないほどの広がりりと高さ。上部はドーム状にせり上がり、そして下には驚くべきことに湖面が広がっていた。湖面？ そう確かに水だ。

湖岸に、といってもそこは氷なのだが膝をつき、水に触れてみた。それは温かくすら感じられた。すくって口に運ぶ。乾燥しきった氷点下の世界ではこんな風に水が飲めるなんて信じられないような贅沢だ。恐らく温泉がわいているのだろう。こんこんと湧く温泉のおかげで凍らずにすんでいるのだ。

湖岸にキャンプすることに決める。火を使わなくても水がふんだんにある。信じられない贅沢な環境だ。しかも温泉の湧き口がそう遠くない場所にあることがわかった。わたしは服を脱ぎ捨て身体を洗った。標高6000メートルで温泉に入ろうとは。そして翌朝それは起こった。

朝日が湖の先から射し込んできた。湖の対岸に外に通じる開口部があるらしい。そしてその光に照らされて、頭上に広がる氷のドームと、湖に湛えられた水と、温泉から立ち上る蒸気とが、まぶしいほどに輝き、わたしは渦巻く光の中で立ちつくした。頭に浮かんだのは、死ぬんだろうか、という考えだった。

死に臨んで天界の幻想を見ているのではないかと思ったのだ。それからわたしは笑った。大丈夫、助かるだろう。この水を渡りきれば外に出られる。零度より温かい水なら何とかなるだろう。ドームに光が溢れ、湖面が波立ち、湯気がゆっくりとたなびいていく。それは水の戯れだった。

水の戯れに、わたしは声を立てて笑い続けた。

(「水の戯れ」 ordered by shirok-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

クレバス

<http://p.booklog.jp/book/39941>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39941>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39941>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.